

共通感覚の欠如としての狂気

—カントと狂気のご案内—

石原孝二

はじめに

「共通感覚」(sensus communis/ common sense)は哲学の歴史の中で様々な意味で使われてきた。共通感覚は、大きく分ければ、諸感覚を統合する能力としての共通感覚と、人々に共通する一般的な判断力(すなわち「常識」)という意味をもつ(Cf. 中村2000[1979])。この二つの意味は、密接に関連している。諸感覚を統合する能力は、現実を構成する能力であり、その能力が他の人々と大枠において一致する場合に、常識的な判断力を持つことができると考えることができる。

この共通感覚に関する障害は特に現象学的精神病理学の伝統において、精神障害と関連づけられて論じられてきたが(Blankenburg 2007[1969]; 木村 2006[1976]; 2007 [1989]; Stanghellini 2004)⁽¹⁾、精神障害(狂気)と共通感覚との関係はロックやカントにおいてもすでに言及されていた。特にカントの哲学の展開にとって、共通感覚と狂気との関係づけは重要な意味を持っている。

カントは『実用的見地における人間学』(初版1798年、第2版1800年、以下『人間学』)で狂気にみられる唯一の普遍的な特徴は「共通感覚の欠如」とであると主張している。しかしカントが狂気について論じたのは、この『人間学』が最初ではない。カントは1764年の「あたまの病気に関する試論」という論文で、狂気の治療に関して哲学が貢献する可能性について検討を行っている。この論文ではしかし「共通感覚」への言及はない。そして、『人間学』では「共通感覚」と狂気の関係について論じられる一方で、狂気の治療に対する哲学の貢献は断念されている。狂気を共通感覚の欠如とみなすことと、狂気の治療に対する哲学の貢献可能性の否定は少なくともカントにおいてはつながっているのではないだろうか。本稿ではデカルトとロックの狂気に対する態度についても触れながら、そのことを少し検討してみることにしたい。

1. 狂気と理性の他者

ベーメ兄弟はデカルトからカントにいたるまでの近代の意識哲学が、非理性的なものを排除することによって展開されてきたことを指摘している(Böhme and Böhme 1985: 17)。しかしこの「非理性的なもの」に果たして「狂気」が含まれ

るかどうかは難しい問題である。哲学はそもそも狂気を扱うことができるのだろうか？

この問題に関連する議論として、フーコーとデリダの間で交わされた有名なやりとりがある⁽²⁾。まずフーコーは『狂気の歴史』で、デカルトの『省察』(Descartes 1996b [1642])の懐疑は狂気を排除することによって可能になっていると主張する。

デカルトは、夢や錯覚の可能性を避けるのと同じようには、狂気 (folie) のもつ危険を避けたりはしない。(Foucault 2011[1961]: 67; 邦訳65)

人は、自分が狂人であるとは、思考によってであれ、想定することはできない。まさしく狂気は思考の成立を不可能にする条件だからである。……夢想とか錯覚は、真理の構造そのものなかで征服されるのに反して、狂気は、懐疑する主体によって排除されているのである。(Foucault 2011[1961]: 68-69; 邦訳66)

夢や錯覚が真理の構造において思考する主体によって克服されるべきものであるのに対して、狂気はそのようにして克服される必要はない。狂気は思考する主体を不可能にするものであり、思考が成立していることによって狂気はすでに排除されているからである。フーコーはこの狂気の「排除」を、17世紀における非理性の追放という歴史的な転換を示すものであるとする。デカルトの『省察』(初版)が出版されたのは1641年であるが、フーコーが狂気の排除・監禁の象徴的な出来事として挙げているパリにおける「一般施療院」の開設の布告が1656年のことである (Foucault 2011[1961]: 71; 邦訳69)。

16世紀の<非=理性>は、一種の開かれた危険を形づくっていて、その威嚇はつねに、すくなくとも権利においては主体性と真理との関係を危うくする可能性をもっていた。だが、デカルト的懐疑の道程が証拠立てていると思われるのは、17世紀になると、そうした危険はとりのぞかれて、狂気は、主体が真理を求める権利を保有しているとされるその帰属領域、つまり古典主義的思考にとって理性そのものである領域のそとに置かれるということである。(Foucault 2011[1961]: 69-70; 邦訳67)

フーコーのこうしたデカルト解釈に対して、デリダ (Derrida 1979[1967]) は詳細な批判を加えている。デリダの議論は錯綜しているが、まとめると以下のようになるだろう。①デカルトは夢の生起の可能性を「真理の構造のなかで」乗り越えてはいないし、全面的誤謬の可能性は斥けられてはいない。②デカルトにとって、狂気は感性的錯覚の一つの例に過ぎず、狂気よりも夢のほうが認識論的によ

り重大な誤謬の可能性を含んでいる。③デカルトの「コギト」の価値は狂気のただ中においても失われることはない。

デカルトのテキストは、フーコーの読みとデリダの読みの双方を許容するものだろう。確かにデカルトは懐疑する主体が狂人である可能性を論証抜きで排除しているが、他方で、それはわれわれ誰もが経験する「夢」という、狂気よりもより普遍的で重大な問題に移行するためであると考えられることもできる。いずれにしても、(デリダが指摘するように)『省察』においてはそもそも狂気が理性的批判の対象となっていないことは確かである。懐疑する主体の存立を不可能にするものとして慎重に排除されているにせよ、感性的錯覚の一つの例として重視されていなかったにせよ、デカルトは狂気を正面から論じていない。

2. ロックと共通感覚

デカルトが狂気の問題を正面から論じていないのに対して、ロックは狂気と理性の関係について少し踏み込んで論じている。『人間知性論』の第2巻第11章では以下のように述べられる。

白痴 (idiots) と狂人 (mad men) の違いは、狂人が観念を間違って集め合わせ、間違った命題を作り上げるが、そこから正しく推論を行うのに対して、白痴は命題をほとんどもしくはまったく作らないし、ほとんど推論を行うことがないということにある。

(Locke 1979[1700]: 2.11.13)

白痴が理性 (reason) と推論 (reasoning) の能力を欠いているのに対して、狂人は推論の能力に問題はない。狂気は観念の間違った結合に由来するものであり、そのような狂気を完全に免れている人間はほとんどいない⁽³⁾。このように、ここでは、狂気と理性は対比的には捉えられていない。

ところが、第四版 (1700年) で付け加えられた第2巻第33章「観念の連合について」では、狂気は「反理性」であることが強調されている。「私がそれを狂気というような不快な名前と呼ぶことは、理性 [reason] の反対がその名に相応しく、また実際に狂気であると考えられている限り、許されるであろう。それからまったく自由であるような人間は珍しい……。」(Locke 1979 [1700]: 2.33.4) 狂気が観念の連合に由来するという考え方は変わっていないがここでは、観念の習慣による連合が理性の働きを妨げるのだと主張される。

かくして理性を捕らえ、共通感覚 (common sense) から誠実な人間の目をそらせて導くものを検討してみれば、そこには、我々がここで述べていることが見出される。互

いに関連のない、独立した観念が、教育や習慣により、また党派が繰り返し主張することにより、心の中で結び合わされ、常に一緒に現れることになるのである。

(Locke 1979 [1700]: 2.33.18)

ロックはこうした観念の自然でない、間違った連合が哲学や宗教における「融和できない対立」をももたらすものだと考える。理性は本来観念の自然な連合に従うことによって、意見の一致を見るはずなのに、慣習や教育という理性の働きを阻害する要因が介在することによって、我々の心は「共通感覚」から離反してしまうのである。ロックは「共通感覚」の定義を与えていないが、人類に共通する自然な判断力というような意味で使っている（『統治二論』(Locke, J. (1988 [1690]) ではそうした用法が多くみられる。)⁽⁴⁾

3. 「あたまの病気」の分類

ロックの考え方に従えば、「共通感覚」からの離反が理性的な判断を狂わせ、哲学的・宗教的な対立の原因となっているのであり、そうした「頑固さ」(obstinacy) (Locke 1979[1700]: 2.33.2) は、狂気と一続きのものである。狂気は、誰もがもつ理性の働きの歪みから生じるものなのであり、理性的な対話を通して合意へと至るプロセスを阻む人間の性質の極端な表れなのである。しかしロックにおいては、こうした捉え方はそれほどはっきりと打ち出されているわけではない。この関係を明確に示したのがカントである。

カントの「狂気」に対する態度を確認する上で重要なテキストは3つある。前批判期の二つのテキスト「あたまの病気についての試論」(1764)と『視霊者の夢』(1766)、そして、晩年に出版された『実用的見地における人間学』(『人間学』) (1798/1800) の3つである。

まず「あたまの病気についての試論」についてみておくことにしよう。カントはこの論文のねらいについて次のように述べている。

それゆえ、病気に名前をつけることで患者に十分な効果があったとみなしている医者の方法を模倣すること以上のやり方は私には思い付かない。そこで私は、あたまの麻痺した愚鈍 (Blödsinnigkeit) からあたまの痙攣した癡狂 (Tollheit) にいたるまでのあたまの疾患 (Gebrechen des Kopfes) の簡単な一覧表を作成しようと思う。

(Kant 1977a: 888; 邦訳388)

論文の終わり近くでは次のように述べられる。

この痛ましい疾患 (Übel) には、それが遺伝性のものでさえなければ、さいわいにもまだ回復する望みがある。そして、この場合にとくに必要とされるのが医者への援助にほかならない。しかしながら、私は哲学者に敬意を表してそこから哲学者を除外したくはない。というのも、哲学者はこころの健康法 (Diät des Gemüts) を提示することができるからである。ただその際には、ほかの大部分の仕事の場合と同じように、哲学者がこの仕事に対して報酬を要求しないという条件がつく⁽⁵⁾。

(Kant 1977a: 901; 邦訳404)

「医者の方法を模倣する」という宣言や「報酬を要求しない」という条件づけは、哲学が医療にとって代わり、精神疾患に対するプロフェッショナルの役割を引き受けるものではないことを明確にしている。しかしロックが主張したように、理性使用の歪みが狂気にいたるものであるならば、理性使用をその検討対象とする哲学が狂気の治療に何らかの仕方で寄与できるのではないだろうか？ ロックはそのための具体的な作業へと踏み込まなかったが、カントはこの論文でその作業を試みるのである。

カントはまず「あたまの疾患」を「愚鈍」(Blödsinnigkeit) と「錯乱した心」(das gestörte Gemüt) に分けている。「愚鈍」は「無能力の病気」であり、理性や感覚一般の能力を欠くものとされる。他方、「錯乱した心」は「倒錯の病気」である。ここでのカントの関心は「たいていは治らない」病気である「愚鈍」には向かわず、「錯乱した心」の分類へと向かう。カントによればこの「錯乱した心」は Verrückung, Wahnsinn, Wahnwitz の三つに区分される。Verrückung は「経験的概念の倒錯」であり、現実と「幻想」(Chimära) の区別がつかなくなっている状態を指す。それは「感官」(Sinn) の障害であるとも言えるものである。他方、Wahnsinn と Wahnwitz は正しい経験から倒錯した判断を下す「悟性の錯乱」(Kant 1977a: 897; 邦訳399) である。このうち Wahnsinn がその「最初の段階」であるのに対し、Wahnwitz はその「第二段階」であり、「無秩序におちいった理性」である。カントはさらにこの三つの基本的な疾患の段階や相互の結びつきや「激情」との結びつきによって、ヒポコンデリー、メランコリー、躁狂 (Tobsucht)、狂暴 (Raserei) などの様々な疾患を分類していくことを試みる。

このような分類は疾患の治療にとってどのような意義があるのだろうか。Verrückung に陥っている人は、いわば「誤った表象から正しく推論する人」であるのに対し、悟性の錯乱に陥っている人は、「正しい表象からまちがった仕方 (auf eine verkehrte Art) 推論する人」である⁽⁶⁾。「誤った表象」を持つ人が、悟性に問題があるのではなく、「心の中に概念を呼び起こす能力」に問題があるのに対して、「まちがった仕方で推論する人」(「理性的根拠」を把握できない人) は

「悟性そのもの」が損なわれているとされる。したがって「誤った表象」を持つ人に対しては、理性的な判断を対置させてみるのが効果的であるが、「まちがった仕方でも推論する人」には、理性的討議は役に立たないばかりか有害でさえある。というのも、そうした理性的討議は、「そのひとたちの倒錯したあたまにばかげたことを生み出す新しい素材を提供するだけだからである。」(Kant 1977a: 900; 邦訳403) したがって、両者の区別は、精神疾患をもつ人々に対する対応の仕方を考える上で重要であることになる。

しかし、そもそも理性的推論の能力に問題が無く、誤った表象を持つ人に対して理性的判断を対置しても意味が無いのではないだろうか。カント自身が指摘するところによれば、「幻想にまどわされるような人は、理性的討議によってさえもみずからが感覚と思ひ込んでいものの現実性を疑うようになることはけっしてない」(Kant 1977a: 893; 邦訳395)。

この短い論文のなかでさえ、カントは自ら分類した狂気のカテゴリーに対して、一貫した対応方法を提示できていない。カントがこの論文で(曖昧な表現で)提示した課題、つまり、疾患の治療にとって何ほどか役に立つような疾患の哲学的な分類を行うという課題を果たすためには、この不整合を修正しつつ、より精密な疾患の一覧表を作成する必要があるだろう。しかしカントはその後疾患の分類という課題をしばらく放置し、批判哲学の構築へと向かう。カントが再び疾患の分類という問題を取り上げるのは、批判哲学の主要著作と啓蒙に関する小論「啓蒙とは何か」を発表した後の、晩年の『人間学』においてである。

4. 感覚の錯覚と理性の欺瞞

「あたまの病気についての試論」出版の2年後にカントは匿名で『視霊者の夢』を出版している。この論文は、ストックホルムの「視霊者」スウェーデンボリの超常体験を吟味することを動機として書かれたものである。スウェーデンボリは、霊魂や死者の魂と交流し、生きている人間には知りえない情報を得ることで有名となっており、1749年から1756年にかけて12巻の浩瀚な書籍『天界の秘儀』(Swendenborg 2009)を出版していた。『視霊者の夢』は第一部で霊魂は認識不可能であるという議論を展開し、第二部でスウェーデンボリの超常体験や『天界の秘儀』を検討するという構成になっている。この論文がカントの狂気観を確認する上で重要なのは、この論文における視霊体験の排除が狂気の排除によって担保されているからである。そのことはカントの次の文章に示されている。

だから私は、読者が視霊者を、別の世界の半市民 (Halbbürger der andern Welt) とみなしたりせず、はっきり言えば〔精神〕病院に入るべきものとして対処し、それによ

てさらなる一切の探求から免れるとしても、そのような読者を悪く思いはしない。とはいえ、そのような立場に立つてすべてを考えるならば、靈魂の王国のような大家たちを扱う方法もまた、上に述べた諸概念に従う方法とは大いに異なったものでなければならぬ。そして昔は、そうした大家たちの幾人かを時には火あぶりにする必要があると思われたが、今ならば、ただ下剤をかけて排泄すればそれで事足りるのである。

(Kant 1977b: 959; 邦訳348)

視霊者は、かつては抹殺する必要があったが、今では病院に監禁し、治療すべき対象である。読者は視霊者を狂人と見なすことによって、視霊者を「市民」として扱い、その発言をまじめに検討する必要性から免除されることができるのである。カントはなぜそのような結論に至ったのだろうか？

カントがそもそも『視霊者の夢』を執筆したのは、一時期、スウェーデンボリに関心を持ち、視霊体験をまじめに検討しようとしたからである (Kant 1977b: 924; 邦訳230; 坂部1966; 1967)。しかし『天界の秘儀』を購入し、その内容を検討したカントはスウェーデンボリと視霊体験をまじめに検討しようとしたことそのものに羞恥心を覚える。「われわれは〔まじめに受け取った自分を〕少々恥ずかしく思いながら、愚かしい探究から手を引く。そして少し遅すぎたとはいえ、理性にかなった次のような反省をするのである。すなわち、賢明な思考というもの是一般に難しいことではないが、ただ残念なことにそれは、しばらく騙された後でないとは可能ではない、と。」(Kant 1977b: 981-982; 邦訳303) 今や、視霊体験について批判的に検討することすらもリスクな行為である。「私は自分が嘲笑される恐れはまずないと思うが、その理由は〔たとえ〕私がこのように愚かしいこと〔Torheit〕(仮にそう呼びたければ)に首を突っ込んでも、それでも私は大変優れた大勢の仲間たちの中にいるという事実があるからである。そしてフォントネルもそう信じているように、この事実さえあれば、少なくとも賢くないと思われぬために十分なのである。」(Kant 1977b: 969; 邦訳288)

愚かではないという保証は、「優れた大勢の仲間たちの中にいる」という事実によってのみもたらされる。視霊体験を論証したり、反駁することはそもそも不可能であり、それをまじめな探究の対象とすること自体が理性を危うくする。視霊体験は「相手にしない」のが最も賢明な対応なのである。視霊体験をもつ人間は、経験の仕方において一様ではないのであり、われわれと「共通の世界」(Kant 1977b: 952)を持つことができない。

先に引用した「下剤をかけて排泄すればよい」というカントの言葉は、この「共通の世界」を持たない人間を理性的対話の対象から除外することを宣言するものである。幻想と現実を区別することができない人間を「別の世界の半市民」

として、対話の相手として考慮する必要はない。スウェーデンボリのように世間に向けて情報を発信している「視霊者」は病院に監禁し、治療対象とすることによって公共世界から排除すれば良いのである。

前節では、「あたまの病気についての試論」でカントが「感官」の障害と「悟性」そのものの障害とを区別し、「感官」の障害については理性的討議が役に立たないと考えていたことに触れた。しかしまた、この点に関するカントの態度には不整合があることも指摘しておいた。『視霊者の夢』では、「感官の錯覚」(Täuschung der Sinne) と「理性の欺瞞」(Betrug der Vernunft) が対置されたうえで、両者の関係について次のように言われている。「理性の欺瞞の原因はよく知られており、その大部分は、心の能力を自分の意志で調整したり、空しい好奇心をもっと制限したりすることによって、かなりの程度防げるのに対して、感官の錯覚は、あらゆる判断の究極の根拠に関わっており、もしその究極の根拠が間違っていたら、論理学の諸規則にはそれに逆らうだけの力はほとんどない」(Kant 1977b: 974; 邦訳294-295)。ここでカントは明確に「感官の錯覚」のほうがより深刻な障害であるという立場を取っている。「理性の欺瞞」については対処方法があるが、「感覚の錯覚」については対処が困難である。対処が困難な感覚の錯覚については、「相手にしない」ほうが賢明である、ということになる。

5. 他者の視点の取得

カントはもちろん精神疾患を持たない人でも感覚の錯誤がありうることや、個人の経験が多様であることは認めている。しかし経験的な錯誤や経験の多様性自体がカント哲学の直接的な批判対象となることはない。「経験的使用においては理性の批判は必要ない。なぜなら、理性の諸原則は経験という試金石に従って連続的に経験されるからである。」(Kant 1976: A710-711/ B738-739) カント哲学の課題は多様な経験をもつ人々がいかにして正しく理性を使用することができるのかを示すことにある。

カントの「啓蒙とは何か」(1784年)の冒頭には「啓蒙とは人間が自ら招いた未成年状態から抜け出ることである」(Kant 1977c: 53; 邦訳25)という有名な言葉が掲げられているが、「人間が自ら招いた未成年状態から抜け出ること」という表現は『人間学』でも再び使われている(Kant 1977d: 549; 邦訳173)。『人間学』では、未成年状態から抜け出すためには「経験という大地のうえを自分の両足で前進する」のでなければならないとされる。とはいえ、経験の仕方は人によってさまざまであり、「複数の頭が同じ対象を観察する仕方には大きな食い違いが生じる」。そこで、経験の多様性を踏まえた理性的な対話が可能になるための格率として、カントは次の3点を挙げている。(1) 自分で考える、(2) 自分を

ひとりひとりの他人の立場に移しかえて考える、(3) 常に自分自身と一致して考える。

「他人の立場に移しかえて考える」という格率はすでに『視霊者の夢』で次のような表現で述べられていた。「かつては私は自分の知性の立場からのみ一般的な人間知性を考察した。今は、私は自分を、自分のものではない外部の理性の立場に置いて、私の判断を、その最も内密な諸動機も含めて他者の視点から考察する。」(Kant 1977d: 960; 邦訳276-277) この「他者の視点から考察する」ことこそが、「光学的な欺瞞」を防ぐ唯一の方法となるのである⁷⁾。

6. 共通感覚の欠如としての狂気

カントは『人間学』で、再び精神疾患の分類を試み、「狂気」(Verrückung)⁽⁸⁾を Unsinnigkeit (amentia)、Whansinn (dementia)、Wahnwitz (insania)、Aberwitz (vesania) の4つに区分している (Kant 1997d: 530-531; 邦訳152-153)。Unsinnigkeit とは、経験が可能となるために必要な連関に自分の表象をはめこむことができない無能力であり、Wahnsinn は構想力が作り出した表象を知覚と見なしてしまう錯乱である。Wahnwitz は錯乱した判断力であり、構想力が悟性のように事物を結びつけて普遍的なものを生み出したかのようにふるまう。そして Aberwitz とは、錯乱した理性の病気で、そこには理性の使用規則に関する無秩序や逸脱のみならず、「積極的な反理性」が存するとされる。

しかし、『人間学』においては、「あたまの病気についての試論」とは異なり、狂気の分類にはあまり積極的な意義は与えられていない。カントによれば、「秩序が根本的に壊れ、しかも治る見込みのないものを体系的に分類することは難しい」のであり、また、「こうした試みに力を注いでもあまり益があるとは思えない」。というのも、「この種の分類は当人の悟性使用を通してのみ目的が達せられるのだが、その際(身体的な病気ならたしかに可能なのだが)当人の主観の諸力が協力してくれないので、分類によって何らかの治療を促進しようという意図は無駄に終わってしまうに違いないからである。」(Kant 1997d: 529; 邦訳151)

そしてカントは Aberwitz における「反理性」を、「共通感覚」(sensus communis)からの離反によって説明している。「共通感覚」とはここでは「(動物の)生の統一に必要とされるもの」を意味する。他方でまた、Aberwitz においては、錯乱した心の諸力が一つの体系に秩序付けられていて、思考能力は事物の真なる認識のために客観的に働いているのではないが、主観的には動物的な生のために働いているのだとされる。

「あたまの病気についての試論」でカントはルソーの影響を受けながら(加藤2000)、「自然状態の人間」や「野生人」は狂気から守られていると主張してい

た。素朴で貪欲ではない自然状態の人間は、狂気に陥る余地がない。市民社会こそが「破滅を引き起こす原因ではないにしても、その破滅的状态を持続させ、それをさらに拡大する」(Kant 1979a: 899; 邦訳402) ものなのである。自然状態の人間において、悟性は、「生の必要と生の素朴な娯楽」にとって必要とされる程度に働く「健全な悟性」である。悟性が過剰に必要とされる限りにおいて、それは「洗練された悟性」となり、そこに狂気の余地が生まれる。

『人間学』において、カントは動物的生の統一と理性的対話を開く能力という、人間にとって共に最も根源的であるとともに、対極に位置するように思われる能力を包括する「共通感覚」の欠如によって狂気の特徴づける。このような二重性をもった「共通感覚」の欠如として狂気の特徴づけることは、カントの「啓蒙」の考え方に沿うものであろう。カントにとって、「啓蒙」とは、「経験という大地のうえを自分の両足で前進する」ことであった。あらゆる権威や先入観から自由になり、自分の経験のみに依拠し、自分自身の悟性を使用することこそが、啓蒙を可能にする。しかしまた、啓蒙の担い手となる人間は、自分の表象を自分のものとして把握しつつ、それを他者のそれと比較することができなければならない。「共通感覚」の欠如はそうした能力を奪うのである。カントにとって共通感覚は動物的生の統一をもたらすものであるが、その共通性は、個々の個体(個人)を越えて、他の個体との感覚様式の共有をも含意する。共通感覚は単に動物的な生を統一へともたらすだけのものではなく、客観的な認識を行うことが可能なしかたで、思考的な諸能力を統一へともたらすものなのである。

狂気 (Verrücktheit) に見られる唯一つの普遍的な兆候は、共通感覚 (Gemeinsinn; sensus communis) の欠如 (Verlust; 喪失) とそれと入れ代わりに現れる論理的強情 (der logische Eigensinn; sensus privatus) であるが、例えば真昼間、その場にいる別人には何も見えないのにある人には自分の机の上で光が輝いているのが見えるとか、他人には聞こえない音が聞こえるとかである。これが狂気の兆候といえるのは、われわれの判断が正しいかどうか、それゆえにまたわれわれの悟性が健全かどうかを一般的に吟味する試金石は、われわれが自分の悟性をまた他人の悟性と照らし合わせ、反対に自分の悟性に閉じこもって自分の私的な表象にすぎないものを基にして公的であるかのような判断を下したりしない、という点に存するからである。それゆえ、単に理論的な意見の表明に当たりにすぎない著作を発行禁止とすることは……人間性を侮辱するものである。というのは、この措置は、われわれからわれわれの私的な思想を正すための、唯一という訳ではないにしても最大にして最も有効な手段を奪うからであるが、その手段というのは、自分の思想がまた他の人々の悟性と合致するかどうかを知るために、自分の私的な思想を公的に表明することにほかならない。

(Kant 1997d: 535-6; 邦訳158-9)

自分の表象・思想を公の場で表明することこそが、理性的対話にとって不可欠な手続きとなる。「狂気」とはまさにそうした手続きを不可能にするとして位置づけられている。そしてそうした狂気は、理性的対話を可能にするとともに、動物的な生を統一へともたらず能力としての「共通感覚」の欠如に由来するものなのである。

7. 結語

理性と狂気の関係という課題はデカルトによって示唆されたが、デカルト自身は夢における錯誤というより一般的な議論に移行することによって、狂気の問題を正面から扱うことを結果的に回避する。他方ロックはすべての人間に見られる理性使用における歪みと狂気との間に連続的な関係を見てとろうとする。こうした立場の帰結は、理性批判としての哲学的な作業が、狂気の治療に何らかの形で役にたつのではないかという想定であろう。しかしロックはその具体的な作業に着手することはなかった。前批判期のカントは「あたまの病気についての試論」で、狂気の種類を通じて、哲学的な議論が狂気の治療に役立ち得ることを示唆する。ところがカントはその後分類による治療への寄与を追求することなく、批判哲学の構築へと向かう。批判哲学を構築したあとのカントは、『人間学』で再び狂気の種類を試みているが、そこではカントは狂気の種類の治療への意義をほとんど認めていない。このことは、批判哲学の確立を通じて、カントが狂気を理性批判の対象とすることが可能なものから、理性批判の対象外のものへと移したということの意味していると考えられることができる。その動きはすでに『視霊者の夢』で示されている。カントの批判哲学への歩みは、狂気をその対象から除外していくプロセスと表裏一体なのだとと言える⁹⁾。狂気の排除がカントや啓蒙思想全体にとって重要な意義を持っていたことは、バーメ兄弟やカント研究者たちによって指摘されてきたが (Böhme and Böhme 1985; Rauer 2007)、狂気理解や精神医学の展開の歴史にとって、デカルトからカントにいたるまでの哲学と狂気との関係を考慮に入れることは重要な作業なのではないかと思われる。精神医学の誕生を告げる『精神異常もしくはマニーに関する哲学・医学論』(Pinel 1800)¹⁰⁾をピネルが出版するのは、カントの『人間学』の初版の2年後のことである。

* 本稿は「共生のための障害の哲学」第15回研究会「共通感覚と障害：イヴン・シーナ、カント、フッサール」(2015年3月9日、東京大学駒場Iキャンパス)での発表原稿を大幅に加筆修正したものである。なお本研究はJSPS 科研費(24300293)の助成を受けている。

注

- (1) 現象学的精神病理学における共通感覚に関する議論については、本林（2014）が詳しく検討している。石原（2013: 132）では、現象学的精神病理学による精神病理的経験と共通感覚の障害との関連づけは、精神障害を持つ人々を「共通の世界」から排除する方向性で行われてきたこと、またその起源がカントにあることを示唆した。
- (2) 詳しくは Lee (2013: Scene 2) などを参照。
- (3) Ahonen (2014: 136) によると、すでにストア派において、狂気はすべての人にとって一般的なものであるという考え方が示されている。ストア派は一般的な狂気は（医学的な狂気と異なり）、道徳的に「中立的な」事柄が誇張されることによって生じると考えていた。(ibid.)
- (4) 「共通感覚」(common sense) はその後18世紀のいわゆるスコットランド常識学派によって重視され、一般化されることになる。スコットランド常識学派のカントへの影響については、Kuehn, M. (1987: Chap. IX) 参照。なおここでロックが言う「共通感覚」は、デカルトの『方法序説』の冒頭で言われる「良識」(bon sens) に近いものだろう。デカルトも「共通感覚」(sens commun) という言葉を使っているが、もっぱら諸感覚を統一する感覚という意味で使っている（中村2000 [1979]: 184-190）。デカルトは「屈折光学」で共通感覚と狂気の関連について少し触れているが、脳神経の異常によって外部から像を受け取る能力としての共通感覚の機能に問題が生じ、幻覚が生じると考えていたようである (Descartes 1996a [1637]: 141; 邦訳153)。カントも「視霊者の夢」で（「共通感覚」という言葉は使用していないが）似たような考え方を示している（Kant 1977b: 956-958; 邦訳270-272）。またイタリアの医師キアルージは狂気を「共通感覚器官の障害」とみなし、その障害の原因を脳神経の異常に求めている（Chiarugi 1987 [1793-1794]: 13-4. Cf. Gerald 1997）。
- (5) この箇所は「あたまの病気」(Krankheit des Kopfes) について述べられている箇所ではなく、「こころの病気」(Krankheit des Herzens/ Krankheit im Gemüte) について述べられた箇所である。しかし「こころの病気」と「あたまの病気」のカントの区別は必ずしも明瞭ではなく、また、この箇所は論文の最後の段落であり、論文の結論的な部分にあたるものと考ええる。
- (6) カント (Kant 1977a: 899; 邦訳402) はこの表現をテラッソン僧院長に由来するものとしている。
- (7) 『判断力批判』(Kant 2009: § 40) では、他者の立場に身を置く能力と共通感覚は結び付けられて考えられている。中村（2000 [1979]: 43-44）参照。なお坂部（2006: 210）は次のように述べている。「カントを心の底からゆり動かし、そのことを生涯の一大転機として自覚せしめたものは、自己完結的な「理性」よりは、端的に他者の立場に立ち、他者の視点をみずからのうちに取り入れるる「あわれみの情」という情念にみずからの思考を定位し、一切のもっともらしい看板や文明の虚飾を外した、生地のままの人間こそ何にもまして尊く、他の一切の価値は、それを基準としてはかられ、それを基準として以外にははかられえない、というルソーの思考の基本的な姿勢にほかならなかつたのである。」しかし少なくとも『視霊者の夢』や『人間学』での「他者の視点」の導入は、むしろ「理性」の公共性を確保し、非理性を排除する

という役割を果たすものだろう。

- (8) Verrückung はここでは「あたまの病気についての試論」とは異なり、狂気一般を指す語として使われている。
- (9) Rauer(2007) は前批判期のカントのテキストを詳細に分析しながら、「非理性的なものとの対決」がカントの批判哲学の展開にとって重要な役割を果たしたことを指摘している。Rauerによれば、カントの理性批判と「狂気批判」(Wahnkritik) は表裏の関係 (Spiegelverhältnis) にある。「この表裏の関係は、単に、心理学的な時期 (1763-1766) に狂気批判を展開し、それを〔論理学への〕応用の時期 (1768-1781) に理性批判へと移したというだけではない。この表裏の関係は、心理学的な時期も論理的な時期も、非理性批判と理性批判の部分に分けられるということにも見られるのである。」(Rauer2007: 77) さらに Rauer は、批判期全体において、狂気批判が重要な役割を果たしていたのだと主張する。『純粹理性批判』の超越論的演繹論が認識から狂気を排除するためのものであったのと同様に、『実践理性批判』の定言命法は、社会的・倫理的なものにおける狂気を世界から取り除くためのものなのである (p. 79)。
- (10) ピネルはロックやコンディヤックの著作の重要性について言及している (Pinel 1800: 45; 邦訳53)。狂気に関する伝統的な医療とは一線を画した近代の精神医学の誕生に哲学からのインプットが重要な役割を果たす一方で、近代の精神医学は哲学の手を離れて独自のディシプリンを形成していくことになる。

文献

【欧語文献】

※引用文中の訳文は、必要に応じて邦訳の表現や文章を変更した。

- Ahonen, M. (2014). *Mental Disorders in Ancient Philosophy*. Cham, Heidelberg, New York, Dordrecht, London: Springer.
- Blankenburg, W. (2007 [1969]). Anätze zu einer Psychopathologie des ‚Common sense‘. In W. Blankenburg, *Psychopathologie des Unscheinbaren. Ausgewählte Aufsätze*, hrsg. v. M. Heinze, Berlin: Parodos, 2007, pp. 97-117. W. ブランケンブルク 「コモン・センスの精神病理学への手がかり」『目立たぬものの精神病理』(木村敏、生田孝監訳)、みすず書房、2012年、pp. 124-152.
- Böhme, H. and Böhme, G. (1985). *Das Andere der Vernunft. Zur Entwicklung von Rationalitätsstrukturen am Beispiel Kants*. Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1983, 1985.
- Chiarugi, V. (1987 [1793-1794]). *On Insanity and Its Classification*, Translated with a Foreword and Introduction by George Mora. Canton, MA: Science History Publications. (*Della pazzia in genere, e in specie, trattato medico-analitico, con una cneuria di osservazioni*, Firenze: Presso Luigie Carlieri.)
- Derrida, J. (1979 [1967]). Cogito et histoire de la folie. In J. Derrida, *L'écriture et la différence*. Paris : Seuil, pp. 51-97. J. デリダ 「コギトと狂気の歴史」『エクリチュールと差異』(合田正人、谷口博史訳)、法政大学出版局、2013年、pp. 61-123.
- Descartes, R. (1996a [1637]). *Discours de la méthode & Essais*. *Œuvres de Descartes*, VI, Publié par C.

- Adam and P. Tannerz, Paris: Vrin. デカルト著作集第1巻『方法序説および三つの試論』（三宅徳嘉、小池健男、青木靖三、水野和久、赤木昭三、原亨吉訳）白水社1973年、増補版2001年。
- (1996b [1642]). *Meditationes de prima philosophia* (1641, 1642). *Ceuvres de Descartes*, VII, Publié par C. Adam and P. Tannerz, Paris: Vrin. R. デカルト『省察』（山田弘明訳）、ちくま学芸文庫、2006年。
- Foucault, M. (2011 [1961]). *Histoire de la folie à l'âge classique*. Paris: Galimard. M. フーコー『狂気の歴史：古典主義時代における』（田村俣訳）新潮社、1975年。
- Gerard, D. L. (1997). Chiarugi and Pinel considered: Soul's brain/ person's mind. *Journal of the History of the Behavioral Sciences*, 33(4): 381-403.
- Kant, I. (1976). *Kritik der reinen Vernunft* (1781, 1787), hrsg. v. Raymund Schmidt, Hamburg: Felix Meiner. 『純粹理性批判』上・中・下（有福孝岳訳）、カント全集4-6、岩波書店、2001-2006年。
- (1977a). Versuch über die Krankheiten des Kopfes (1764). In Immanuel Kant, *Werkausgabe*, II, hrsg. v. Wilhelm Weischedel, Frankfurt am Main: Suhrkamp, pp. 887-901. I. カント「脳病試論（あたまの病気についての試論）」（加藤泰史訳）、カント全集2、岩波書店、2000年、pp. 385-405.
- (1977b). Träume eines Geistessehers, erläutert durch Träume der Metaphysik (1766). In Immanuel Kant, *Werkausgabe*, II, hrsg. v. Wilhelm Weischedel, Frankfurt am Main: Suhrkamp, pp. 921-989. 「視霊者の夢」（植村恒一郎訳）カント全集3、岩波書店、2001年、pp. 227-313.
- (1977c). Beantwortung der Frage: Was ist Aufklärung? (1784). In Immanuel Kant, *Werkausgabe*, XI, hrsg. v. Wilhelm Weischedel, Frankfurt am Main: Suhrkamp, pp. 53-61. 「啓蒙とは何か」（福田喜一郎訳）、カント全集14、岩波書店、2000年、pp. 23-34.
- (1977d). Anthropologie in pragmatischer Hinsicht (1798, 1800). In Immanuel Kant, *Werkausgabe*, XII, hrsg. v. Wilhelm Weischedel, Frankfurt am Main: Suhrkamp, pp. 387-690. 「実用的見地における人間学」（渋谷治美訳）カント全集15、岩波書店、2003年、pp. 1-331.
- (2009). *Kritik der Urteilskraft* (1790), hrsg. v. Heiner F. Klemme. Hamburg: Felix Meiner. 『判断力批判』上・下（牧野英二訳）、カント全集8-9、岩波書店、1999-2000年。
- Kuehn, M. (1987). *Scottish Common Sense in Germany, 1768-1800. A Contribution to the History of Critical Philosophy*, Montreal & Kingston: McGill-Queen's University Press.
- Lee, K. (2013). *Reading Descartes Otherwise. Blind, Mad, Dreamy, and Bad*. New York: Fordham University Press.
- Locke, J. (1979 [1700]). *An Essay Concerning Human Understanding*. 1689, 4th ed. 1700. Edited with a forward by P. H. Nidditch, Oxford: Oxford University Press, 1976, 1979. J. ロック『人間知性論』（大槻春彦訳）、岩波文庫、1972-1977年。（引用箇所は巻、章、節を数字で示す。）
- (1988 [1690]). *The Two Treatises of Civil Government*. Edited and with Introduction by P. Laslett, Cambridge: Cambridge University Press, 1960, 1988. J. ロック『完訳統治二論』（加藤節訳）、岩波文庫、2010年。
- Pinel, P. (1800). *Traité médico-philosophique sur l'aliénation mentale, ou La manie*. Retrieved from <http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k432033>. P. ピネル『精神病に関する医学 = 哲学論』（影山任

佐訳)、中央洋書出版部、1990年。

- Rauer, C. (2007). *Wahn und Wahrheit Kants. Auseinandersetzung mit dem Irrationalen*. Berlin: Akademie Verlag.
- Stanghellini, G. (2004). *Disembodied Spirits and Deanimated Bodies: The Psychopathology of Common Sense*. Oxford: Oxford University Press.
- Swedenborg, E. (2009). *Arcana Coelestia (1749-1756)*. Translated from the Original Latin by John Clowes, Revised and Edited by John Faulkner Potts. West Chester, Pennsylvania: Swedenborg Foundation. Retrieved from <http://www.swedenborg.com/emanuel-swedenborg/writings/rse-downloads/>

【邦語文献】

- 石原孝二 (2013). 「精神病理学から当事者研究へ：現象学的実践としての当事者研究と〈現象学的共同体〉」、石原孝二、稲原美苗編『共生のための障害の哲学：身体・語り・共同性をめぐって』 *UTCP Uehiro Booklet*, No. 2, 東京大学大学院総合文化研究科附属「共生のための国際哲学研究センター」上廣共生哲学寄附研究部門、pp. 115-137. <http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dspace/handle/2261/55485>
- 加藤泰史 (2000). 「脳病試論：解説」、カント全集2、岩波書店、pp. 564-568.
- 木村敏 (2006 [1976]). 「離人症の精神病理」、『自己・あいだ・時間』ちくま学芸文庫、pp. 104-187.
- (2007 [1989]). 「離人症と行為的直観」、『分裂病と他者』、ちくま学芸文庫、pp. 373-396.
- 坂部恵 (2006 [1967]). 「『視霊者の夢』の周辺」、坂部恵集1『生成するカント像』岩波書店、pp. 81-145.
- (2006 [1969]). 「カントとルソー：時代に先駆けるものの喜劇と悲劇」、坂部恵集2『思想史の余白に』岩波書店、pp. 207-232.
- (2006 [1985]). 「視霊者の夢」、坂部恵集1『生成するカント像』岩波書店、pp. 339-365.
- 中村雄二郎 (2000 [1979]). 『共通感覚論』、岩波書店.
- 本林良章 (2014). 「共通感覚の現象学」(博士論文、神戸大学). http://www.lib.kobe-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003kernel_D1006015.